

イテにおいて武装解除を受けたが、その時の中隊生存者は五十崎隊長代理以下僅かに五人であった。

## 私の軍隊日誌

(ルソン戦末期)

岐阜県 藤川 一 男

大正十年名古屋で生まれ、昭和十六年甲種合格となる。遠州浜松在、三方ヶ原九十七部隊へ十七年入隊する。甲種幹部候補生として水戸陸軍飛行学校へ入校、十八年二月卒業と同時に昭南島「カラン」第三航空軍第二十四飛行場大隊へ初年兵をいんそつし、見習士官として赴任する。

十八年九月「ジャカルタ」へ行き十四年飛行場大隊は移駐のため、私は「ジャカルタ」飛行場整備班長となり、「スラバヤ」「マラン」「ボゴール」「カリヂャチ」「バンドン」「パリギ」「グリヤ」「ダシクマラヤ」等をまわり大小さまざまな飛行場を知ることが出来た。

翌十九年四月昭南「テンガー」飛行第七十七戦隊整備隊長として赴任する。着任してみると、この戦隊は「ニューギニアのホーランヂャ」において戦隊長以下戦死し、生き残りの中野少尉が少数の兵と共に戦力を回復するための戦隊であった。いんそつの補充兵を引渡すと同時に昭南島「センバワン」第十七練成飛行隊に充用される。

十九年十月十五日比島「マニラ」南方総軍航空兵器部付となる。情報によれば、総軍は西貢に転進中。十月十八日第四航空軍司令部付で十一月四日四航軍へ赴任のため森少将に随行「カラン」飛行場離陸。同日「マニラ」「ニルソン」飛行場に侵入をはかるも上空敵機で不能となり海上退避後やっと着陸する。状況すこぶる悪るし。宿舎に入るも「空襲サイレン」燈火管制となんと落ち着かない。

第四航空軍司令官富永中将に森少将と共に申告をし、同時に司令官より口頭により四航軍航空兵器部付「小沢大佐」勤務となる。本当にあわたたしいなかで推移した。管制下の暗いなかで毎日が過ぎた。飛行機補充がままな

らぬ間に二十年一月元旦を迎え、司令部の周囲は管制で暗くゲリラの横行もあり不安がいっぱいである。

戦況利あらずで司令官も安眠まなならずとか。四日になると突然状況悪化のためバンバンへ移駐し、六日米軍「リンガエン」上陸を受信する。戦況は急を告げ九日「エチアゲ」バンバンに集結を断念。全司令部要員は「バンバン」の楠田少佐の指揮に入る。第四航空軍司令部は戦力回復のため台湾に転進を始める。楠田少佐以下「バンバン」要員は「サンチャゴ」に集結する。

昭和二十年二月一日、司令部要員は四日「マニラ」を捨て、この時点より我々は転戦彷徨、敗走、降伏の道をたどる運命となった。以下、日を追って記憶をたどることとした。

昭和二十年二月一日、第四航空軍司令部ルソン派遣隊編成のため「サンチャゴ」「ソラノ」司令部残置人員を統合編成する。派遣隊長——楠田少佐、副官——藤川少尉。三月五日第五輸送隊編成（サンチャゴ）尚武兵站監洪中將の指揮下に入る。輸送隊長——楠田少佐、副官——藤川少尉。三月二十一日、臨時独立第二步兵団長の指揮に

入る。五月二十日、臨時歩兵大隊編成、兵站監直轄となる。五月二十九日、楠田大隊主力「バンバン」到着同時に尾田中佐の指揮下に入らしめられ「アリタオ」に前進。到着と同時に筑波山麓の西側高地に陣地構築する。

六月一日、偵察布陣。六月三日、作業完了任務につく。敵は「アリタオ」に向い猛進撃のため我が方は、敵戦車撃滅隊が敵の攻撃を受け、その機能をうしなえりとの報が続く。六月四日、敵「アリタオ」へ進出、第二中隊敵の火炮により損害大なり。大隊行李連絡をたつ。損害きわめて大なり。六月五日、前日に続いて敵の砲撃続くが我が方守勢あるのみ。弾薬火炮極めて劣勢でいかんともなしたがたし。座すよりはと、各隊斬りこみをはかる、戦果きわめて少なり。刻々と損害は増すばかりである。六月六日、敵機動部隊「アリタオ」に進入、兵站路を完全に遮断される。第一中隊上野小隊連絡をたつ。敵の砲撃と飛行機により制圧され、なすすべもなし。大隊は司令部と連絡をとりつつ戦闘を続行、陣地を撤収する。鉄兵団（第十師団）も連絡なし。第一中隊連絡をたつ。六月九日、第二中隊途中「ママヤン」部落付近にて「ゲリラ」

と交戦損害を受ける。六月十三日、第一中隊中村少尉以下六人、鉄兵団司令部へ連絡のため出張。本当に御苦労様、無事任務を終え帰還されるよう、心中より祈る。六月四日、交戦中の不明者無事復帰する。六月八日、連絡をたった第一中隊より連絡兵到着、その後の行動判明せり。六月十四日、付近の住民より敵歩兵部隊約六十人、迫撃砲をもって「モンギヤ」部落学校付近に侵入せり、との情報を手する。六月十五日、大隊を分散配置。六月十六日、第二中隊中井少尉を将校斥候として状況偵察に出す。六月六日、連絡をたった第一中隊上野小隊復帰する。六月十七日、中井将校斥候より報告あり、敵情「モンギヤ」学校西方五十メートル高地に迫撃砲四門を兵力五十から六十のもよう。第一中隊宿营地東南方二十メートルの高地を砲撃中。しだいに東方に移動しつつあり。六月十八日、大隊は鉄兵団経理部糧秣輸送を援助のため「ピノン」東方部落に移駐する。六月二十一日、大隊は重機分隊をのぞき鉄兵団輜重第十連隊長の指揮下に入る。大隊主力は「カシブ」にありて糧秣を蒐集並びに輸送に任じるため「カシブ」に向け出発する。六月二十二日、

藤川少尉は第二中隊と連絡、これが誘導のため残置。二十三日夕刻「カシブ」に向け出発の予定。六月二十三日、鉄兵団司令部に十三日派遣の山村少尉以下六人任務を終え無事「ピノン」に帰還。敵中をかいくぐり、暗夜野を抜け山中にひそんでの辛苦思うだに惨酷のきわみというほかなし。任務とはときとしてかくも非情なものなのか。全員無事であったのが唯一の救いであった。二十時、中村少尉ほか五人休む間もなく「カシブ」に同行出発する。六月二十四日、敵飛行機の襲撃を山頂にさげ潜伏。夕方「カシブ」へ向け出発する。六月二十五日「カシブ」へ先発の浦山小隊に二泊する。六月二十六日、大隊本部「カシブ」に到着。大隊は「コンコン」の峠の警備につく。六月二十七日、大隊は鉄兵団司令部経理部長の指揮下に入らしめらる。

七月二日、大隊は「コンコン」部落に移動、途中「ゲリラ」に遭遇応戦、弾薬の浪費は厳禁、保身のために射つ弾も補給はなし。ただ、敵をさげ遭遇せざるを祈るのみ。今日も損害を受ける。七月九日、宿营地「コンコン」付近に「ゲリラ」の襲撃を受け応戦。弾薬が欲しい。今

日も損害を受ける。七月十二日、大隊は「ピナパガン」  
転進を命ぜられる。七月十四日、大隊は「ピナパガン」  
に向け転進を開始する。大隊は夜間の行動を主とし、日  
中は敵をさげ、遮蔽地に野営することとなる。以降は大  
隊間の連絡命令下達も困難をきわめることが予想される  
ので、各隊連絡不能となりたる時は東海岸に目標を取  
り、行軍続行を指示される。

これをさかいに山中転進の苦闘が始まったのである。

七月十五日、今日も夜行軍、日中敵機をさげ野営、大隊  
長以下糧秣を背に山中行軍でしかも夜間の行動である  
が、大半が初めての経験である。七月十六日、前日に続  
き夜行軍。背負った米のなんと重いことか、先のことか  
思いやられる。七月十七日、なんと砂糖の甘いこと、今  
日も重い米が苦になる。あとになって背にくい込む痛さ  
を思い出し、米の有難さが身にしみる。七月十八日、早  
くも塩の大切さをおしえられる。七月十九日、行軍六日  
間をへて背の荷は軽くなり、痛い方が良かったとはなん  
と勝手なものか。さすがに山育ちの者は塩・火・米を実  
に大切にす。太陽の有難さも格別であった。七月二十

日、今日は大トカゲを捕獲し久しぶりに明るい話題が出  
来た。七月二十一日、「マツチ」が無くなり役にたため  
「ライター」だけが残り困っていると、何処からか火打ち  
石が姿をあらわした。これも山育ちの者の生活の知恵で  
あった。ただ、感謝あるのみ。

本日も少ない中身ながらもか腹を満たす。当番兵  
が大蝙蝠を持ってきた。背の高い大木にぶらさがってい  
るのを射止めたといって大はしゃぎの様子であった。七  
月二十二日、湿気の多い山中に入る。標高も相当なもの  
であろう、行軍している私の首すじにも「ヒル」が落ち  
る。痛いと感じるや取って手がすばやく口へいく。こと  
ほどさように空腹の転進である。七月二十三日、細流近  
くの小休止中「サワガニ」をみつけ、我先にと口に運ぶ。  
なんと速いこと、空腹は嫌いだ。

七月二十四日、糧秣の補給はなし、薬品は欠乏、栄養  
失調による「マラリヤ」患者続発するも自力による克服  
のほかなし。落伍者続出の連日なり。七月二十五日、  
我々の移動跡には必ず歩行不能の残留者が毎日のよう  
である。七月二十六日、今日の転進中も先発隊の残留者が

枕をならべ救援を待ち望んでいる。目は口ほどにものさいうとはこのことか、私も栄養失調で部隊の掌握だけで精一杯。何と情け無いことか。気力をふりしぼれ藤川、とわれを励ます。七月二十七日、栄養失調と「マラリヤ」熱で死亡多数。七月二十八日、今日も熱発者続出。七月二十九日、熱望の部落に到着。現地「タロ芋」により空腹を久しぶりにみたす。残留の熱発者にすまないとわびる。七月三十日、ただちに残留者の救出に全力をつくすと同時に無事を祈る。休養室宿舎の設営にかかる。七月三十一日、残留者を救出した時の喜びはひとしおであった。同時に宿舎で久方ぶりに安堵をおぼえた。第二中隊古池中尉戦死の連絡あり。出発より約二十日、山岳地帯における体験は思い出として何時までも残る。真面目に生き抜いてきたことは戦友との追憶の中で語りぐさとなろう。

八月一日、第一中隊小林中隊長連絡のため本部へ。八月四日、大隊本部第一中隊「ピナパガン」に向かう。八月五日、第二中隊目的地に到着する。八月七日、本部移動中に大蛇を捕獲す、全長一メートル余。八月八日、本

部第一中隊目的地に入る。八月九日、大隊「ピナパガン」集結完了。藤川少尉、中尉に進級、第二中隊長となる。

八月十六日、敵飛行機よりの落下傘宣伝「ピラ」により講和を知るも現地に降伏のきざしなし。日々の糧秣に困窮する。菊の葉・バナナと蒐集の明け暮れである。あの背にくい込んだ重い米の感触が思い出される。八月二十日、下見部隊「ラチオ」により、状況入手。東郷外相声明「ポツダム」八箇条の条件をもって講和の用意ありと。八月二十二日、細川軍曹以下四人情報蒐集のため出張。八月二十三日、大隊は糧秣蒐集のため原田以下十人「ピナラパット」付近に向け出発。下見隊へ情報入手のため中井少尉を派遣する。

八月二十四日、駐屯地最高指揮官徳永大佐に異状事態下の駐屯申告のため第二中隊長出張。八月二十五日、「マニラ湾上に於て第一回会談」実施の八月二十三日付情報入手する内容次の如し。

- 一、八月三十一日、東京湾「ミゾリー」艦上調印。
- 二、米国武装軍七千五百人中三千人横須賀に上陸。
- 三、横須賀駐在の武装せる日本軍隊は横須賀より撤退

すること。

四、二十五日を期し日本国籍の飛行機は地上にあること。

五、艦船は指定せる港湾に入る。

六、潜水艦は水上に浮上し白旗を掲げ指定せる所まで進むこと。

七、会談には各国参加のこと。各国とは米英ソ支澳、

ミニッツ参加（ホノルル）

八月二十六日、大隊は「ダビック」方面前進のため先発として樺沢少尉の小隊を糧秣蒐集並びに設営のため派遣する。

九月一日、大隊主力立野曹長以下「ダビック」「マサヤ」に向け出発。連絡所開設のため藤川中尉以下三人残置連絡任務につく。九月五日、「カシブ」入院中の森軍曹退院帰隊。先発せる立野曹長誘導のため帰隊する。九月七日、八月十八日付米軍「マニラ」司令部発行落下傘「ニュース」入手、日本降伏。九月八日、中井少尉マラリヤ熱発就寝。九月九日、立野曹長以下任務を終え帰隊する。原田曹長以下糧秣蒐集の任務をはたし「ピナラバツ

ト」より損害を受け悲しみの内に帰隊する。中井少尉治療、任務につけり。糧秣、薬品欠乏し、栄養失調発熱するものがつづく。大隊は毎日天候と糧秣に支配されすぎて行く、これでよいものか。九月十日、六月六日「アリオ」転進以来「ラジオ」無線皆無「ニュース」傍受不能のため「デマ」の横行しきり。敵飛行機による落下傘「ニュース」で知るだけである。今日の「ニュース」一、満州は支那が占領。二、朝鮮は米国が占領。三、東京は灰燼となり、復興には米国が手を貸している。四、米英ソ支の政治顧問が日本にくる。以上の思いもよらないものばかりだ。「ピナパガン」駐屯下見大隊より入手の「ニュース」もいつに変わらず不安の材料となっている。なによりも皆が内地の「ニュース」に飢えている。連日の糧秣蒐集で部隊は必死で苦勞している。本日久しぶりに「バナナ」一人に十本の配給あり。四本から五本が毎日の夕食である。最近特に熱発者が続出し、ついに「キニーネ」が底をつき、新しき敵「マラリヤ」と毎日が苦闘である。「バナナ」の木を米糞がわりにしお世話になった。

九月十二日、九月十一日駐屯地会報並びに命令受領。

九月十日鉄兵団へ方面軍より軍使到着。師団は近く「ヨネス」に集結予定、同日、楠田大隊は師団直轄となる。

鉄作命甲第三〇三号第十師団命令

一、軍は大命により戦闘行動を停止し、九月三日米軍

比島方面最高指揮官に対する降伏文書を調印せ

り。八月二十九日十七時以降、余に与えられたる

作戦任務を解除せらる。(第一項のみ)

参謀長指示

一、各部隊は特に軍規風紀を厳正にし団結の強化を図

り、隊伍正々堂々と行動し、皇軍の威容を發揮す

るものとし、苟も軍規を乱す者は直ちに嚴重に処

断するものとす。(第一項のみ)

以上により副官より命令指示の下達連絡あり。この間

集合者全員心そこにあらず、放心せるもののごとし。我

が大隊唯一人の職業軍人楠田少佐も流石に顔面蒼白、緊

張そのものであった。解散後ただちに全員に命令指示の

伝達をする。中隊長としてのその後の言葉をみつけるこ

とが出来ず大命のいたすところなれどくやしきはつき

ず。

戦局をかえりみてわれに糧秣、兵器、弾薬、医薬品と

すべての補給にことをかき、戦意昂揚のすべを失う。こ

の時、大命を拝受する。我が大隊の運命を思えば一瞬安

堵をおぼえわれにかえる。安堵と躊躇の交錯するなかで

生きるべしと、生への執着がわく。私は軍人としていつ

だつせざりしか、人間としては如何に、直立不動のなか

に悔恨にも似たものが一瞬よぎった。立野指揮班長の

「注目」の声に助けられた「悔いるもよし、悔いざるもよ

し、無心あるのみ。大命のいたすところ道あり。」と転迷

開悟する「大御心を奉し残念の一言につきる。」とかうう

じて言葉になった。

九月十二日、大隊は十五日集結地へ出発。第二中隊樺

沢小隊は先発隊となり十四時出発。遠藤軍曹は患者收容

所へ患者受領のため出発する。九月十三日、各隊転進準

備、本日天候快晴、全員心中暗雲満つる運命とはいえ、

なんと酷なるものか。九月十四日、転進準備完了し出発

を待つ。行く先の不安を秘め、それぞれ日記を記すもの、

又素足の行軍にあみあげ靴のありがたみを語りあうも

の、また必要が生んだ草鞋、火打石等の効用、それぞれ  
転進中の過ぎた思い出に花が咲いている。

九月十五日、大隊長出発にあたり訓示一、兵の身上の

世話 二、軍紀の厳正 三、団結の強固 四、統帥の厳  
正、本日は前日にかわり朝より厚い雲がかかり全員の土  
気があがらず。望郷の念はつゝのる。一日のびた出発であ  
るが、全員最後まで軍衣の補修洗濯、宿舍の掃除、周囲  
の清掃と、立つ鳥あとをにごさずのおしえ。指揮班長の  
一致協力ぶり有り難いことである。九月十六日、大隊は  
午前五時出発、先遣隊原田曹長の誘導により十一時三十  
分「フグ」到着「ダビック」より背おって来た、「バナナ」  
南京豆に最後の別れを惜しみながら腹を満たす。この日  
我々の得た情報によれば、一、比島の米軍は「クリスマ  
ス」に全員帰還 二、集合地へ集結した部隊より順次一  
日四千人単位で日本へ送還する「デマ」。権沢少尉より本  
部伝達事項の連絡。一、武装解除地点迄現地より約五キ  
ロ 二、「カダヤン」河を渡河、乗車地点迄五キロ、三、  
本日は現在地「フグ」に宿営。四、出発明十六日午前六  
時以上。大隊は各隊宿営の準備、第二中隊宿営地付近に

は現住民が多数はいりこんで隊員と談笑、物品の取引交  
換がしきりである。

九月十七日、大隊は武装解除地点へ向け出発。カガヤ

ン河渡地点到着乗車、米兵は口笛を吹きながら陽気に作  
業。比島人の傭兵は横柄なものである。みると中村少尉  
が「ピストル」で時計を没収される。隣では軍票ほか珍  
しいものとみると取りあげているようだ。覚悟はしてい  
たがなさないやら臍甲斐ないやら、降伏のあじびとし  
おであった。第二河渡地点に到着、ここでは米軍のみの  
作業隊でなかなか紳士的のようであった。直ちに車両を  
乗り替え「エチアゲ」に到着する。最後の検査を揮一本  
で受ける。「DDT」の洗礼とは何とものはや、「シャワー」  
の後、被服等一切の支給を受け所持品の検査ですべてを  
終わる。幕舎で一泊の予定らしい。給与は朝夕二回、本  
日は徳永大佐殿と行動を共にする。九月十八日、午前一  
時予定が変更され「トラック」にて出発する。途中故障  
「サンホセ」に到着、十二時我々は途中現地人より投石  
また「生卵」を投げられる。罵声をあびせられる。これ  
に耐えながら思うのは祖国のことばかり。今夕は収容所



に一泊の予定となる。給与は米軍携行糧秣（レーション）を支給される。珍しさにひとときの花が咲く。楠田大隊長とは解除されてより連絡なし。

九月十九日、本日未明、予定変更され「タガイタイ」行輸送列車に乗車、仮収容所に入所する。九月二十日、今日より折たたみ式「ベット」に毛布の生活がやっと出来るようになった。身のまわりの整理に忙しい。九月二十一日、住まいが落ち着くと早くも食べ物話が始まった。どこも皆同じ話で花が咲いているようだ。九月二十二日、現住民が早速「フェンス」ごしに食べ物を見せびらかしてさかんに手まねをする。九月二十三日、今日も故郷の名物、みやげものの自慢話ばかりである。九月二十四日、柵ごしの現地人が目にあまるので米兵が威嚇、時には発砲することもあった。九月二十五日、帰国の話は遠のくばかり。今日もおほぎ、ばた餅、食べ物話ばかりである。九月二十六日、私もついに歯の金冠をはずし齧の缶詰と交換をするはめとなった。空腹とは何とあさましきものかな。久しぶりの舌づつみも一瞬の夢のごとし。九月二十七日、午後二時より予防接種を受ける。

十月一日、今日で武装解除以来十五日になる。仮収容所の毎日に望郷の念がつのるばかり。相変わらず松本中尉、小川少尉、佐藤大尉等酒飲みが顔をあわせての地酒の自慢話に酔っている。内地送還も取りざたされるもうわさばかりである。十月二日、今朝も雨だ。入所以来雨の毎日である「タール」湖畔の高原地帯にある幕舎は、続く雨に一帶をいつもぬかるみにされる。久方ぶりに幕舎長根本少佐殿と顔をあわせ、食事の話から食器が一九四五年製であることから物量の豊かさ、装備の優秀さへとはずむ。しかし、おかゆの給与では満腹感がない。それでも時がくると支給の食器をもって並ぶことのくりかえしである。所内の会話も落着きを取りもどしてきたようだ。剣道の話が飛び出して「ビックリ」志村部長、近藤先生、久田先輩となつかしい人が思い浮かび、話に活気が満ち大変楽しい一日であった。早く昔話のできる日が待ち遠しい。十月三日、今日は演芸会が開かれ楽しかった。思えば南方転進のため九州日出生台（久留米師団の演習場）に駐屯した時を思い出した。今日と同じように慰問団の方々の熱演に感謝感激したことである。久

方ぶりに森町の思い出に熟睡する。楽しい夢とはこうしたものでか。十月四日、今日も昨夜よりの雨で地面がゆるむ。米軍機が上空を飛ぶと昭南の思い出がめぐる。三島大尉殿、永代軍医殿、石井軍医殿等その他お世話になった方々はと、思い出すにつれめぐりめぐってくる気分はおもい。今日の天候に同じ。本日より給与米二百グラム半分となる。第二回予防接種。十月五日、今日も演芸会が開かれる。一人芝居のだしものが一等賞を受けた。昨日の注射のためか頭がおもく、発熱気味である。くる日に希望もなく給与も十分でないなかでは、食べ物話に終始するのもやむなしか。

十月六日、久方ぶりの晴天に冷氣加わる祖国の肉親はいかにありや、今日突然出所不明の「怪ニュース」幕舎につたわる。

一、南鮮陸海軍要員輸送の為輸送船十一日「マニラ」港出航予定。

二、「タテッルソン」「ミンダナオ」に七隻入港、二万三千人を輸送、患者・邦人婦女子を第一とし残余を旧軍人にあてる。

三、一週間以内に酒保を開設する。

以上「デマ」でないことをひっしに祈った。十月七日、今日も早朝より太陽が輝いて「ラジオ」体操も一団と力が入る。昨夕急に臨時点呼が召集される。情報によれば糧秣庫に何者かが侵入、MPに射殺された者があったとのことで、所長の注意により明確となり、静けさをとりもどす。給与減量に対する「レジスタンス」か、皆に不安のきざしをみる。十月八日、早朝よりの雨で雲がいっぱいである。軍医による乗船要員の選定があるらしいと、之も「デマ」らしい。十月九日、第一回乗船帰還説は「デマ」に終わる。天候はよし体調も何時になく快調。十月十日、早朝より雨降りしきる。兵は就役のため集合ご苦労様です。十月十一日、本日米軍よりの情報として、乗船帰還近しと第三回予防接種を受ける。夕空は牙え大変に美しいが、注射のためか体がだるい。十月十二日、今日も晴天で暮らし良い気候だが風強し。十月十三日、変化のない仮収容所生活は退屈だ。十月十四日、淋しさに「椰子の実」の歌を口にする。十月十五日、今日とはとなりから「天国に結ぶ恋」「青葉の笛」が聞こえてく

るのに聞きほれて口づさむ。歌は心をいやしてくれる。十月十六日、退屈がこうじて不満の様相が満ちる。食べ物の話の種も品切れのようすだ。

十月十八日、本部に呼び出され訊問が始まる。十月二十日、幕舎内の空気にわかにいそがしい。十月二十四日、本日より幕舎単位の会議始まる。大隊長更送問題を主体として討議される。新旧の思想交錯して一致をみず。十月二十五日、前日に引続き会議では自由主義、民主主義がやたら飛び出し判断理解に苦しむばかり。なにはともあれ班長や先任者はご苦労様です。十月二十五日今夕、第六十六中隊の若干名の乗船のため幕舎をあとにしたようだ。十月二十六日、乗船も「デマ」の連続で内地との連絡もなく「デマ」「デマ」の飛びかうなかでの明け暮れである。十月二十七日、将校の戦犯軍事裁判開かれるとの情報の流れ、あちこちにささやきが流れる。十月二十八日、軍事裁判の話題で悶々の一日が続く。十月二十九日、今日も昨日と変わりなし。十月三十日、将校全員陣地構築のため強制就労の噂しきり。十月三十一日、十月も終わる。今日も「デマ」が飛びかう。

十一月一日、今日は久々に内地の毎日・読売新聞を手、復興のようすを知ることが出来た。記事に東山公園付近周辺が出ていた。むさぼり読んで満腹し、すこし落ち着くことが出来た。十一月二日、今朝は風もなく晴天である。仮収容所大隊長による巡視が実施される。十一月三日、明治節の一日ことなく暮れる。

十一月六日、あんなに待つこと久し、乗船命令を本日受領す。しかし、喜ぶ気配よりも疑心暗鬼多し。十一月七日、早朝仮収容所出発。鉄道貨車に分乗する。目的地的不明のため不安がさきばしる。途中無蓋車のため現地人の投石、放水罵声にあう。私も生卵をなげつけられた。あわれというもおろかなことである。望郷に思いをよせ、ひたすら忍の一字あるのみ、ただ日本に帰りたい。十一月八日、港へついて日章旗をみるもまだ帰還の実感を持つことが出来ない。上陸用舟艇に分乗本船に向かう。十五時本船に乗船する。甲板士官より本国送還船と聞かされ、感無量。船名は旧海軍海防艦「イオウ(伊王)」であることを知らされた。

十一月九日「マニラ」港十三時出港。ここにきて日章

旗を仰ぎみ、自分の頬に涙を感じた。航海中はおもっぱら食事当番を任とした。当番以外は甲板に出られないため船倉中には不安がいっぱいだ。またなれぬ米飯と「ミン汁」の給与のため下痢患者の続出で、早速厠に不便をする。健康はなにもまさると知る。剣道に出会い修練を受けたたまものと感謝せり。十一月十日、今日も食事当番、船倉の不安以前消えず。十一月十一日、鍛えた身体に感謝しながら食事当番につく。十一月十二日、下痢患者相変わらず増すばかり、祖国の港を目前に涙をのんだ者もあるとか。十一月十三日、甲板士官より本国ちかしの説明を受けるも水平線のみで実感なし。いまだ不安のみ。十一月十四日、九州鹿児島湾に入る。島影をみて落涙する。涙が口に入る、涙とはこんな味のするものなのか。いつまでも忘れないであろう。

十一月十五日、加治木港に上陸、復員局の手続きをおえる。焼跡の帖左駅を十六時十七分発にて名古屋へ向かう。長い捕虜生活から開放され、やっと自由の身となつて祖国の大地を足下に出ることが出来た。窓に「ガラス」のない列車に栄養失調の身をやっと運びこむ。食事をす

るにも金がない。帖左駅では復員局で支給された金を「芋マンジュウ」に使いはたし、すかんびんである。しかし、人情未だ地に落ちず。車中で銀「シヤリ」のおにぎりをいただきながら食の道中であつた。途中原爆の広島で車両交換で停車をしたので悲惨なようすを目撃した。語らざるなかに一同犠牲者に黙禱し、今日からの復興への努力をちかう。列車に乗りこむも栄養失調と発熱の身の悲しさ、なかなか窓からすべりこめない。みかねた車中の人に助けられやつのりこむ。帰国して早々に同胞の厚い親切にふれて、心がなごむことが出来第一歩を名古屋に印する。

生家のあとは焼野原である。そこに立って初めて、私の戦後が始まることを自覚する。親兄弟の無事を知り身の幸せを知る。大いにかんばろうと覚悟をあらたにする。ここに今次大戦に参加した経過の概要と教育、転進、降伏までの記憶と軍隊日誌をたどりながら所感と反省を加え記すこととした。

戦友たちの死を乗り越え大御心に添う事を堅く心に秘め瞑想の中に筆を置く。